



エグゼクティブ向け資料

食品・飲料の製造に新たなイノベーションをもたらす

「わかっていない」ことを理解していない最大のリスク

食品・飲料メーカーの皆さんは、どのような経営をされていますでしょうか？ホワイトボードで管理する週計画、在庫管理は表計算ソフトで集計、KPIの実績やパフォーマンスに至っては、実は集計されてなかったりしませんか。もし、従来のERPや手作業のシステムに依存している場合、多くのデータを保有しているにもかかわらず、既存のシステムはサイロ化し、部署の間で共有はあるか、データの信ぴょう性を確認する手作業を各個人が日常業務にしているのかもしれない。

これらの質問の答えが「はい」でも、「まあそうなんだけど、仕事はこれで回っているしこれで十分」とお考えかもしれません。昨今の食品・飲料市場は、変化が著しく、競争も激化しています。そのため、全社的かつ包括的な見える化とコラボレーション能力が不可欠になっているのです。新しい機会を生かすためには、ビジネスを成長させながら、変化する市場に素早く対応し、食品の安全性を確保し、廃棄物を削減し、持続可能なプロセスを導入するためのアジリティ（俊敏性）と柔軟性が必要です。現在のビジネスはデータドリブンであり、ビジネス上の意思決定を行うためには、いかにデータを活用するかが変革への鍵となるのです。

最新ERPの活用には組織全体の文化的な変革が必要です

最新のERPシステムの考えの根底にあるのは、単なるシステム運用ではありません。従業員が一つの方向に向けて目標を共有、団結し、協力しあうことです。そのためにはデータドリブンな企業カルチャーに向けた意識改革が必要になります。かつてこのような変革の多くは経営陣が主導するのが一般的でしたが、昨今は社内のあらゆる役割から変革のリーダーが参加することで、従業員に当事者意識を持たせることができるのです。

デジタルオペレーションプラットフォーム (DOP) の誕生

現代のERP (Enterprise Resource Planning) システムの原点はさかのぼること100年程前、EOQ (経済発注量) という、在庫を最適化するための意思決定ツールから始まりました。時間の経過とともに、財務やCRM (Customer Relationship Management、顧客関係管理) などの機能が追加され、個々のコンポーネントは、扱いが難しいながらも単一の包括的システムとして統合されました。

ERPの簡単な定義は、食品・飲料生産者が原料の調達、プロセス管理、運営、販売などの日常業務を管理するシステムまたはソリューションです。また、ERPシステムを活用すると、手作業で行っていた業務を自動化することもできます。ERPシステムの目標は、食品と飲料の生産性とアジリティを向上させることです。

これらのビジネスシステムは時代のニーズに応じてきましたが、その時代に利用可能な技術に依存しており、機能は限定的でした。ですから今日のERPは、デジタル・オペレーション・プラットフォーム (DOP) と呼んだ方がいいかもしれません。というのも、アジャイル (俊敏性)、人工知能、エクスペリエンスドリブン、そしてクラウド化にデジタル化といった重要な役割を担う新たな形に変化しているからです。

最新のERP (またはDOP) システムが企業にもたらす主な機能には、次のようなものがあります。

業界や業種に特化したプロセスをサポート: 食品や飲料業界特化の製造プロセスや機能に耐える技術であることをビジネス要件として考慮しなければなりません。

複雑なワークフローを複数アプリで簡単に実現するためのAPI: 複雑なワークフローや分析、コラボレーションなど、さまざまなサービス間で使えるAPI連携。

複雑なアプリケーション環境: 既存のアプリケーションやデータ利用など、複雑なハイブリッド技術環境に柔軟に対応、オンプレミスからクラウドへの移行まで対応。

サプライヤーやお客様とのエコシステム: お客様、サプライヤー、パートナーと企業の枠を超えて業界のテクノロジー・エコシステムをサポート。

拡張性とスケーラビリティを備えた未来志向の製品: 拡張性、スケーラビリティ、パフォーマンスは、ビジネスのアジリティ (俊敏性) を最大化するためのERPの基本的な設計原則の一部であり、従来のUXを超えるユーザーとの対話型のモダリティに対応。

業界およびビジネス固有のニーズに対応: 食品・飲料製造業の業務ニーズに対応する補完的なアプリケーションとERPを容易に統合。

アナリティクス、機械学習、AI向けに接続されたデータ: アプリケーション間のサイロを越えてデータを接続し、企業全体のアナリティクス、オンデマンドのリコメンデーション、AI活用を実現。

セキュリティとリスク管理: 標準ベースのセキュリティ、リスクとフェイルオーバーの管理、攻撃防止、継続的なセキュリティ向上のためのプロセス。

最新のERPシステムのメリット

最新のERPの導入やアップグレードは、まれにビジネスに重大な問題を生じ、目標を見失ったり、中核を担ってきたプロセスが「混乱」する可能性があります。これをリスクと感じる方も多いでしょうが、生産性向上とビジネスの改善の機会を逃すことは、コストとリスクを**はるかに上回ります**。

システムや組織の最新化は、ビジネスに戦略的な影響を与えるに違いありません。これからのプロダクトイノベーション、各部門のKPIやKRの改善など、ビジネス全体のパフォーマンス向上は最新技術に頼ることなしで実践することは極めて困難であるからです。

最新のERPシステムがもたらす大きなメリットには、次のようなものがあります。

使いやすさ: チームメンバーがERPシステムシステムを使用できない場合は、投資利益率 (ROI、Return On Investment) を達成することはできません。最新のシステムは、より直感的で使い勝手が良く、従業員みずからがデータを探し出し、意思決定プロセスに組み込むことが可能です。

より多くの情報に基づいたビジネス上の意思決定: アナリティクス機能でサイロ化されたデータを有機的に結びつけ全体の結果から部門別の責任者までパフォーマンスをドリルダウンできます。つまりデータドリブンな意思決定を推進することで、意思決定を効率的かつ客観的に行うことができ、アナリティクス・マインドセットを組織内に浸透させることができます。全体のイニシアティブとKPIを部門レベルの目標に落とし込み一致させることで、チームや個人は、自分の優先順位が全体的な目標にどのような影響を与えるかを明確に把握することができます。

ROIは、ビジネスの意思決定者にとって常に重要な指標です。最新のERPシステムは、ビジネス・アナリティクス、シナリオ・プランニング、財務インパクト分析を通じて、経営陣の利害関係者とのコミュニケーションをより明確にすることができます。

チーム個人は財務結果から要因分析を行って将来のモデル化に応用するだけでなく、自分の意思決定や判断に高い自信を持てるようになります。また、経営幹部はリソースを的確に投下しているチームや個人への支援を手厚くすることで、よりよい関係が得られることになるでしょう。

優秀な人材の確保と定着：製造業や流通業にとって大きな課題は、長年培ってきた知識やノウハウを持つ従業員を退職で失うことです。一方で、新しい世代が製造業や流通業のキャリアを積むことに抵抗があることも統計的には課題です。若い世代の人材がいなければ会社は成り立たなくなります。デジタルネイティブの世代は、ユーザーフレンドリーなアプリを直感的に使いこなすことができます。また、自分たちの好きなスタイルで働き方をサポートする環境を求めています。彼らは日常生活で使用するようなモバイルアプリの感覚でビジネスアプリケーションを使いこなすわけです。ですから食品・飲料業界では最新のモダンなERP導入はデジタル世代の採用面においても差別化の要因になるでしょう。

業務のサイロ化を解消しコラボレーションを促進：食品・飲料メーカーは、ERPの機能を最新のプラットフォームで運用の枠を超えて拡張することで、ワークフローの改善と生産性向上を図ることができます。チームは、コミュニケーションの改善と横断的なデータを活用することで、時間を短縮し、仕事の精度を高めることができます。ERPの中に実装されたソーシャルツールにより、チームは地域やタイムゾーンを越えて、必要な時に必要な場所で作業を同期・非同期いずれにおいても実践でき、様々なデバイスから豊富な情報を共有することができます。

原材料のサプライヤーやお客様とやり取りなど、ERPが外部からの情報を交換するサポートが必要です。

サプライチェーン管理、製品ライフサイクル管理、注文管理などのプロセスをネットワークでサポートすることで、リードタイムの短縮、ビジネス全体の柔軟性の向上を実現します。在庫レベルやリードタイム、需要予測といった外部データを活用した分析から、計画やスケジューリング、コストとリスク管理と改善のための意思決定を効率的に行うことができます。

主要業績評価指標（KPI）の改善：最新のERPを導入した組織は納期厳守、在庫回転率、社内スケジュールの遵守、運用コストの削減などの指標において、より大きなメリットを得ることができていると回答しています。このようなパフォーマンスの向上は収益に直接影響を及ぼすため、システム導入の費用を捻出することも可能となるでしょう。

新たなテクノロジーの活用：アナリティクス、モビリティ、クラウド、パートナーネットワーク、モノのインターネット（IoT、Internet of Things）は、昨今の製造や流通業界の市場環境では必須の技術です。例えば、IoTとアナリティクスを併用することで、予知保全（機械に搭載された安価なセンサーにアナリティクスを適用するなど）をサポートし、新しいサービスモデルでより大きな利益を得るといったケースが出てきていますし、旧来のERPシステムでは、このようなイノベーションはおろか、システムの弊害による競争力の低下も起こる可能性があるでしょう。

ビジネス全体でのデータ主導の考え方

食品・飲料のビジネスをERPで改善する例として、農場から食卓まで、ブドウからワイングラスまで、一番おいしい状態で商品をお届けするのに役立つもの、というのは少々単純で狭い考え方になりつつあります。それ以上に、最新のERPは経営全体に競争優位性をもたらすものになる可能性があるからです。日々のトランザクションがリアルな結果に結びつくわけですから、そのデータを様々な関係者が活用することで、重要な意思決定を確証をもって行うことができるだけでなく、データによる意思決定の文化こそが組織を強くし、新たな価値創造の礎になるからです。

詳細はこちら 

フォロー：    



インフォアは、業界特化型のビジネスアプリケーションをクラウドで提供しています。17,000人の社員が、175か国以上で65,000以上のお客様のビジネスを支援しています。詳しくは、www.infor.com/ja-jp/をご確認ください。

Copyright© 2023 Infor. All rights reserved. 本文に記載の文字商標および 図形商標は、インフォアおよび/またはその関連会社ならびに子会社の商標および/または登録商標です。本文に記載のすべての他の商標は各所有者の所有物です。 www.infor.com.

東京都千代田区有楽町1-1-3 東京宝塚ビル16階

INF-2287206-ja-JP-1023-2